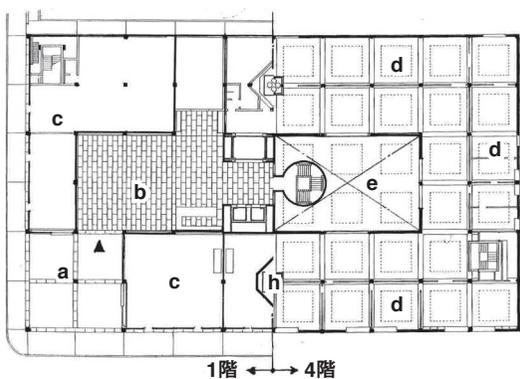


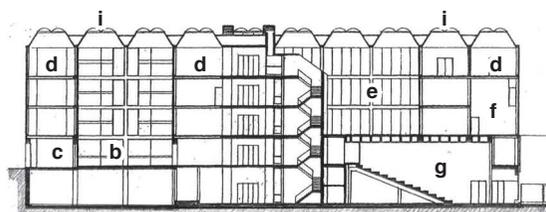
イエール大学英国美術センター 1974年 ルイス・カーン



北西側外観 1階は店舗 外壁ステンレス生板 柱梁コンクリート



1階 ←→ 4階



上平面図 下断面図

aピロティ、ポーチ b入口コート c店舗 d展示室
e吹き抜けホール上部 f図書室 g講堂 hダクトスペース iトプライト

立体格子に組まれた高質な空間

東京で世界デザイン会議が開かれた1960年、欧米から気鋭の建築家達が来日した。ルイス・カーンもその一人だ。当時、学生だった筆者はカーンの講演を聞く機会を得たが、そこでは建築空間をサーバントとサーバードのスペースに分けて論じた。それを直截に実現したのが同年完成のペンシルバニア大学医学研究所だ。後年この建築を訪ねると、ガラスにグレア防止のアルミシートが貼ってあり、研究者から別用途への転換提言を聞いた。欠陥を抱えていたのだ。カーンはそこから学び、幾多の注目作を造り続け、到達したのが最晩年のイエール大学英国美術センターである。

イエール大学の校舎や施設はニューヘブンの街を構成する重要な要素だ。この建築は直交する街路の角地に建つが、一方の街路には、カーンが世に認められる契機となった大学のアート・ギャラリー（'53）が建ち、少し離れてルドルフ設計の建築学部校舎（'63）がある。

カーンの建築は、ルームが建築の元初であり、自らの広がりや構造、光を持つとの考えから、ルームを単位に連結、集合させる特徴がある。また、近現代建築が人の活動と移動を重視して空間を連続的に編成し、水平性志向が勝るとすれば、対して、平面は幾何学的で壁構造と組構造を多用して区切り、留まり在ることを重視し、静的で彫り深い垂直性志向が強い。それは、モダニズム建築のバイオニアが否定したボザールの構成法の復活と言われる。

しかし、この建築は、壁面がフラットな直方体の重さを感じさせぬ落ち着いた都市型建築である。

寄贈された英国近代の収集美術品を展示し、研究する施設であり、オフィス、図書館と講堂を備え、展示室は大きさの異なる絵画、彫刻、家具工芸品への対応が必要で、この敷地に存した商店の収容も求められた。

これに対し、1辺20ft(約6m)の正方形グリッドを縦6列、横10列で平面構成し、地下1層、地上4層のラーメン構造の立体格子に諸空間を組み入れ整序している。街角をピロティにして奥に入口を設け、内部に入ると柔らかな自然光が満ちる4層吹き抜けのコートがある。さらにもう一か所、2階の奥に円筒の階段室が屹立する3層吹き抜けのホールがある。大絵画の展示室で図書館入口もある。この中央部分の二つのボイド空間の周りに展示室他が配置され、人は周回する。また、吹き抜け壁面の開口部を通して位置を知り、一体感を得る。屋上はトプライトを各グリッドに載せ、最上階の展示室と吹き抜けホールに光を注ぐ。

モニュメンタリティ追究から脱して空間自体を対象化し、単純なフレームの中に垂直のボイド空間とその周りに水平の展開性を重ね、晴朗で高質の建築空間を遺した。



左 入口コートの見上げ 右上 コートから入口方向を見る
床はトラバーチン 1階壁は外壁と同じ 上部壁オーク材
右下 4階展示室